

いつか手に取るその日に
dumu.ene.ga.ak.

作..金川翔

登場人物

桜庭行人 (23)

主人公 デビュー作『君だけが知ってる青』が社会現象にまでなった元小説家。その後1冊だけ物語を書いたが、それが世間に評価されることはなかった。現在はデビュー作で稼いだお金で自堕落的に暮らしている。

高梨唯慈 (20)

ヒロイン 不治の病を患っており、家が病院だったことも含めて、基本的に入院生活をしている。本が好きで、行人の『君だけが知ってる青』のファン。

キーラ・スミルノフ (14)

ロシアのストリートチルドレン。排気口のそばで捨てられていたのをイワンに拾われる。その後イワンが育ての親となり、共にホームレスとして暮らしていた。ハンチング帽を深めにかぶり、長いブロンドの髪を隠して男性のように振舞っているがれっきとした女の子

シヤマシユ (9120)

人間たちが営んでいくその人生を素敵な物語だとし、それを書物に収めることにした。全人類の物語を本にし、それを補完、管理し、自分が楽しんでる軽く、ひょうひょうとした性格なうえ、大事なことを話さないのが、基本的に出会った人間からは胡散臭いと言われる。

高梨ねね (死11時25)

唯慈の母親。唯慈を出産後、母体が耐えきれずそのまま死亡。死後、シヤマシユの図書館にて保護され記憶を取り戻すために自分の人生を記した本を読んでいる。

遠藤美穂 (23)

新人編集者。文芸雑誌トウリクシヨンに所属。学生時代に行人の大ファンだった。しかし、2作目以降引退をした桜庭樹に対して、そのことに疑問を持った美穂は、何があつたか知るために編集者になった。

桜庭沙月(20)

行人の母親。天真爛漫な性格で、快活な女性。彼女の強い思いのこもった本「モモ」を持っている和樹にしか彼女の事を見ることはできない。

桜庭和樹 (43)

行人の父親。若いうちに沙月と結婚し、行人を生んだ。早くにパートナーを亡くしたが、行人の存在が和樹に生きる意味を与える。ある日を境に急に物語を書くことをやめてしまった行人に、強く当たってしまい、そこから親子の関係は崩れてしまう。

高梨修一郎 (50)

唯慈の父親。高梨病院の院長を務めている。唯慈の不治の病を治すべく日夜研究の日々を送っている。修一郎にとっては唯慈はねねが残した宝であり、何よりも大切にしている。

千ヶ崎葵 (26)

唯慈の幼馴染で、現在は高梨医院で働いている看護師。修一郎に唯慈の世話を頼まれており、唯慈の身の回りのことはほとんど葵が担当している。唯慈の事をとても大切に思っている。

西村亘 (23)

新人編集者。文芸誌トウリクシヨンの所属。美穂の同僚。彼女に惚れているが、美穂が恋愛に関してあまりに無頓着の為、二人の関係が発展することはまだまだ先の事。

柳田悠(33)

現在の文芸誌トウリクシヨンの編集長。当時行人を担当していた編集者。引退した行人にもう一度本を書いてほしいと願っている。

イワン(年齢不明)

キーラを拾い育てた人物。年齢は不明で、名前も偽名である。日本で言う名無しの権兵衛のような使い方をされる名前。

藍田悠里 (死亡時 16歳)

行人のかつての同級生。行人に小説の魅力を教えた人物。その後、彼の目の前で投身自殺を図り、帰らぬ人となる。彼女の真意は彼女にしか分からない。

マクシム (エレナ) (38歳)

ロシアで孤児院を開いている院長。イワンの息子(娘)。

○ シーン0 行人の夢

行人が暗

闇に立っている。次第に、様々な声が聞こえ始め、行人は耳をふさぐ。

美穂 「この小説知ってる？」

ファン1 「知ってる！ 最近流行ってるよね！」

ファン2 「作者、何て名前だっけ？」

美穂 「桜由樹。まだ高校生なんだって！」

ファン2 「女の子？」

ファン1 「名前にそうじゃない？」

美穂 「すごいよね！ まだ高校生なのに！」

行人 「すごくなんかない」

ファン1 「映像化だって！」

美穂 「マジで！？」

ファン2 「デビュー作なんでしょ？」

ファン1 「そう！ もはや社会現象だって、ニュースで言ってた！」

柳田 「君はまだ高校生だから、覆面小説家として発表することにしましょう。」

行人 「はじめから、言っていれば……。」

美穂 「覆面美少女高校生作家……。憧れる〜！」

行人 「何も知らなかったんだ！」

行人の前に悠里が現れる。しかし、光の加減で顔がよく見えない

悠里 「行人。」

行人 「違うんだ。俺は驚かせたかっただけで……!!」

悠里 「バイバイ。」

行人 「待って！ 悠里！」

行人は、悠里のもとへ駆けていくが、そこにはすでに悠里はいない。

行人 「ハア……ハア……！ うう……。」

胸に痛みが走る。その痛みは、行人の書く力を奪っていく。

和樹 「行人！ 編集の人が来てるぞ！」

行人 「……。」

和樹 「原稿できてるのか！」

行人 「これ……。」

担当編集の柳田に、弱弱しく、出来上がった原稿を渡す行人。

柳田 「……ありがとうございます。」

和樹 「よろしくお願い致します。」

美穂 「桜由樹の新作、読んだ？」

ファン1 「読んだけど……。」

ファン2 「なんかひどくなかった？」

美穂 「え？」

ファン2 「暗いというか、重いというか。つまんない。」

ファン1 「そうそう、私はもつとピュアっピュアなお話がよかったなー。」

美穂 「そんなの、違う作品なんだから……。」

ファン2 「もう別の人が書いたみたいないな感じじゃなかった？」

ファン1 「ゴーストライターのな？」

行人 「勝手なこと言うな！」

和樹 「お前が書かなかったら、これからどうするんだよ!!」

柳田 「私の力が未熟なばかりに、申し訳ございません。」

文芸雑誌トウリクションをもっている美穂

美穂 「……引退？」

行人 「……。」

民衆の声が行人の中で反芻していく。「試しに読んでみたけど微妙すぎない?」「前作は良かったのにな。」「一発屋じゃん」「高校生とか嘘でしょ?」「話題作りだろ」「もともと大して面白くなかった。」「小説家なんて生きていけないから良かったでしょ。」「現実見たってことか。」「理解が出来ない。」「つまらん。」「その後も、いろんな声が、行人の中をぐるぐる回り続ける。」

行人 「もう……。書けません……。。」

小さくうずくまる行人。周りにはもう誰もいない。そこに、シヤマシユが現れる。

シヤマシユ「やあ。」

行人 「……誰だ？」

シヤマシユ「もうすぐ、会えるよ。」

行人 「は? うわっ!」

強い光を發して、シヤマシユは目の前から消える。代わりにこれから、行人を取り巻くであろう人物達が現れる。

美穂と柳田

美穂 「絶対見つけて見せます！ だから！」
柳田 「ダメだと言ってるのが分からないのか？」
美穂 「私は、知りたいんです！」
柳田 「ダメだ！」

修一郎とねね

修一郎 「幸せだったか？」
ねね 「何バカなこと聞いているの。」
修一郎 「私は、きっと今後の人生を不幸だと思ってしまう。」
ねね 「私は幸せだったよ。」
修一郎 「……。すまない。」

和樹と沙月

沙月 「ね。この子は幸せになれるかな？」
和樹 「なれるさ、僕らの子なんだから。」
沙月 「そうだね。私たちの子だもんね！」
和樹 「ああ。」

キーラとイワン

キーラ 「ふざけんな！ なんで黙ってたんだ！」
イワン 「……。」
キーラ 「何とか言えよ！ クソジジイ！」

笑顔でいなくなるねね。入れ替わりで現れる唯慈と葵。唯慈は行人の小説を持っている。

唯慈 「お父さん！ これ読んでみて！ すっごく面白いよ！」
葵 「唯慈！ 院長は忙しいんだからダメ！」
唯慈 「えー、いいじゃん。」
葵 「だーめ！」
唯慈 「葵ちゃん。厳しい。」
修一郎 「葵ちゃんも仕事なんだ。分かってあげてくれ。」
唯慈 「わかってるよー。」
葵 「院長は唯慈に甘すぎです。病人なんだからおとなしくしてなさい。」
唯慈 「そんなにカリカリしてると、しわが出来ちゃうよ。」
葵 「うるさい！」
修一郎 「はっはっはっは。」

唯慈 「ん？」

修一郎 「どうした？」

唯慈 「……。」

唯慈は、後ろからのシヤマシユの気配を感じる。悠里が現れる

悠里 「行人！」

行人 「嫌だ……。」

悠里 「書いてみてよ！ 行人の物語を。」

行人 「書きたくないんだよ！」

シヤマシユが現れ、空間には、行人と唯慈だけになる。二人はお互いの存在には気付けない。

唯慈 「え？」

シヤマシユ「やあ、僕はシヤマシユ、ただのしがない図書館の管理人さ。」

行人&唯慈「シヤマシユ？」

シヤマシユ「この物語は語り部を得た。君たちの時間は動き出す。エンディングまで一直線だ。図書館で会えるのを楽しみにしているよ。」

周りの人物は全員いなくなり、行人は夢から覚める。目覚ましの音。沙月が行人を見ている。

行人 「……夢？」

行人の部屋、行人は目覚ましを止める。

行人 「だる……。」

やつれた顔の和樹がやってくる。

和樹 「起きたのかい？」

行人 「……。」

和樹 「朝食できてるよ。」

行人 「いらねえ。」

和樹を通り過ぎようとしたところで、声をかけられる。

和樹 「行人。」

行人は無視して、外に行く。
和樹 「……。」

和樹は、そのまま自分の部屋に戻る。

○シーン1 唯慈の病室 朝

ベッドで寝ており、目を覚ます唯慈。

唯慈 「夢……？」

ノックの音。葵が入ってくる。

葵 「朝よー。って、珍しいじゃん。」

唯慈 「おはよう。なんか目が覚めちゃった。」

葵 「遠足で寝れない小学生みたいね。」

唯慈 「そりゃあ、今日は待ちに待った外出許可の日だからね！」

葵 「はいはい。まず検査してからね。」

唯慈 「えー。」

葵 「えー、じゃない。おじさん心配させたくないでしょ？」

唯慈 「んー、そうだけど。」

葵 「なら、検査して、ちゃんと太鼓判を押してきてもらいなさい。」

唯慈 「はーい。」

唯慈は、ベッドから降り、本棚からキミアオの本を取り出す。

葵 「相変わらず好きねー。それ。」

唯慈 「いいでしょー。」

葵 「キミアオだっけ？」

唯慈 「うん！」

葵 「飽きないねー。」

唯慈 「尊いってやつだね。」

葵 「何言ってるの。」

唯慈 「初々しい、高校生たちの青春だよ。うーん、尊い。私も高校行きたかったな。」

葵 「行くなら大学でしょ。」

唯慈 「流石にJKはきついかなー。」

葵 「まずは体を治すこと。」

唯慈 「はーい。葵ちゃん看護師さんみたいだね。」

葵 「今は看護師なの。」

唯慈 「葵ちゃんが看護師か。考え深いなあ。」

葵 「馬鹿言ってるんで、あたしは先に行ってるから、準備したらおいでよ。」

唯慈 「はい。」

葵は退室していく。

唯慈 「治らないと、か……。」

唯慈は本をもって、部屋から出ていく。

○シーン2 トウリクシヨン編集部オフィス 昼

慌ただしいオフィス。あちこちのデスクで電話がひっきりなしに鳴っている。

その中で、対面で言い争っている柳田と美穂。亘は自分の席で仕事をこなしている。

柳田 「何度言ったら分かる。」

美穂 「分かりません！」

柳田 「なら、その鳥頭の為にもう一度説明してやるから、しっかり刻みつける。桜由樹に関しては、お前に教えられることは何一つない。そして、今後桜由樹に関して、調べることは厳禁だ。以上。」

美穂 「それでも、私は！」

柳田 「この話は終わりだ。」

美穂 「嫌です！ それじゃ、納得できません。」

柳田 「お前が納得するかどうかなんて関係ない。桜由樹はもう書かない。」

美穂 「私は、あの時あの人に何があったか知りたんです。」

柳田 「一ファンが、ここまで来たことは評価してやる、だが、これ以上はもう割り込める領域じゃない。新入社員の分際で、分をわきまえろ。」

美穂 「編集長が当時、担当だったのは分かっているんです。お願いですから、桜由樹先生について何でもいいから教えてください。」

柳田 「いい加減にしろ！ これ以上ごねるならクビにするぞ！」

美穂 「っ!!」

柳田 「そんなこと調べてる暇があるなら、編集者として、もっと仕事ができるようになる。今のお前はただの給料泥棒だ。」

美穂 「……。」

柳田の電話が鳴る。

柳田 「はい。柳田です。分かったら自分の仕事をしろ。邪魔だ。(電話に戻り) はい、はい。かしこまりました。それでは打ち合わせの日程を……。」

美穂 「……。」

柳田はそのまま電話しながらオフィスを出る。

美穂 「はあ。」

亘 「お前も懲りないな。」
美穂 「うるさいな。」
亘 「編集長にも同情するよ。」
美穂 「だってだって、私がこの会社に入った理由なんだもん。」
亘 「桜由樹ねえ。確かに俺も昔読んだけど。」
美穂 「本当?!」
亘 「お、おう。」
美穂 「私も今でもずっと愛読書よ! 『君だけが知ってる青』!」
亘 「分かった分かった。」
美穂 「当時、柳田さんが担当編集で、この『君だけが知ってる青』通称キミアオは、作家桜由樹のデビュー作、世に出た瞬間から中高生を中心に大ヒット! もはや社会現象とまで言われてた屈指の名作! こんなに有名なのに、桜由樹自体は謎に包まれて、その姿を知ってるのは柳田さんだけ。当時は高校生だったらしいし、ペンネームから女性だと思われて、謎の覆面美少女作家とか巷では言われてた。全女子高生の憧れ。私も憧れて、自作の小説を書いたもんよ。」
亘 「解説ご苦労。でも、代表作ってこれだけだよな。新作とか出なかったのか?」
美穂 「……出たよ。一作だけ。」
亘 「へー、知らなかったな。」
美穂 「あれは……。評判が悪かったから。ゴーストライター疑惑まであったし。」
亘 「ゴーストライター?」
美穂 「それぐらい、前作からかけ離れてたってこと。作品の雰囲気もそうだし、文体とか、いろいろ。それに……。」
亘 「それに?」
美穂 「なんだか、誰かにずっと謝ってるみたい。そんなお話だったんだ。」
亘 「謝ってるねえ。」
美穂 「私は、あの時、桜由樹に何があったか知りたい。絶対、何かがあったに違いないの。それを突き止めて。」
亘 「それでどうすんだ。仮に何かがあったとして、そんなのは部外者のお前がどうこうできる問題じゃないだろ。」
美穂 「んんんん!! それはそうかもしれないけど! とにかく知りたいのお!」
亘 「いや、子供か。」
美穂 「うるさあいい!」
美穂は、荷物を持って、オフィスを出ていこうとする。
亘 「おい! どこ行くんだよ!」
美穂 「捜査の基本は足! 必ず私が、桜由樹を見つけ出してやるんだから!」
亘 「お前は編集者だろ! 仕事をしろおお!」
亘は美穂を追いかけ、オフィスを出ていく。

○シーン3 図書館

テーブルに座って本を読んでいるねねとシヤマシユ。空中には本が何冊か浮いている。

シヤマシユ「なあなあ、ねねさん。暇じゃないかい？ そうだ。たまには僕の本気の占いを見せてあげようか？ 僕はね星占いが得意なんだよ？ 星の位置によって、その人の運命とかいろんなことが分かるんだ！ ほら、上を見てごらん！」

ねね 「……。」

立ち上がるシヤマシユ。無反応なねね。

シヤマシユ「星は見えないねえ。」

ねね 「……。」

シヤマシユ「今日も読みふけてるなあ。だけど、適度なコミュニケーションを取らないといけないと僕は思うんだよね。その辺はどう思う？」

ねね 「……。」

シヤマシユ「今はどのあたりを読んでいるのかなあ。早く全部思い出せるといいね。」

図書館の扉が開く、行人が入ってくる。

シヤマシユ「やあ、いらっしやい」

行人 「は？ なんだここ？」

シヤマシユ「待ってたよ、いやー、久しぶりの利用者だ。」

行人 「あんた……。」

シヤマシユ「ん？」

行人 「いや……。」

シヤマシユ「ようこそ僕の図書館へ。僕はシヤマシユ、ここのがない管理人さ。」

行人 「図書館？」

図書館の中を観察する行人。上を見て浮いている本を見つける。

行人 「……なんだあれ……。」

シヤマシユ「何が読みたいかな？ これなんかおすすめだけど……。」

行人 「いやいや、おかしいだろ！ こんなでかい建物じゃなかったし、どうなってんだよ！」

シヤマシユ「それは簡単な話。ここは、君が入ってきた建物とは別の空間だからさ。」

行人 「別の空間……？」

シヤマシユ「ここは愛を忘れた者が迷い込む場所。この世界のどこにでも扉は現れるけど、この世界のどこにも存在はしないのさ。」

行人 「言ってることが何一つとしてわからん。頭がおかしくなりそうだ……。」

シヤマシユ「習うよりは慣れるだよ。はい。」

シヤマシユは棚から一冊本を取り出し、行人に渡す。

行人 「なんだよ。」

シヤマシユ「本だよ。」

行人 「見ればわかる。」

シヤマシユ「図書館に来たんだ。本を読まなかったら何をするって言うんだい？」

行人 「……。」

シヤマシユ「大丈夫。死にはしないよ。」

行人 「何言ってるんだ……。」

言いながら本を開く行人。

行人 「なんだこれ。白紙じゃ……。」

その瞬間、行人は悠里の記憶を見せられる。学校の屋上。柵の向こうに悠里がいる。

行人 「なんだ？」

悠里 「行人」

行人 「悠里？」

悠里 「バイバイ。」

悠里が飛び降りる。

行人 「うああああ！」

シヤマシユが強引に本を閉じる。悠里の夢の世界が消える。

行人 「はあああ、何だこれ……。」

シヤマシユ「んー、ちょっと刺激が強い記憶だったみたいだ。大丈夫かい。」

ふらつく行人にシヤマシユは手を貸そうとするが、行人はその手をはねのける。

行人 「おい……。なんだよ今の。」

シヤマシユ「君の事を愛している人間の記憶だよ。」

行人 「どういう意味だ。」

シヤマシユ「この本には、人間一人の人生が記されている。君は彼女の記憶の一端を見せられたんだ。」

行人 「悠里の記憶……？」

シヤマシユ「気分はどうだい。」

行人「……あんた何もんなんだよ……。」

シヤマシユ「ただの管理人だよ。」

行人「気色悪い。」

行人はふらつきながら、帰ろうとする。

行人「帰る。」

シヤマシユ「続きは気にならないのかい？」

行人「……。」

行人は扉を抜けて図書館を出ようとする。行人の目の前で扉が開きキーラが飛び込んでくる。行人とぶつかる。扉は閉まる。

行人「……。」

キーラ「痛ってえな！ どこ見てんだよ！」

行人「っち、うぜえ……。」

キーラ「んだと？」

行人はキーラを無視して、扉を開き、図書館を出る。

キーラ「おい！ 無視すんな！」

シヤマシユ「やあやあ、こんにちは。」

キーラ「あ？ なんだお前？」

シヤマシユ「僕はこの管理人だよ。」

キーラ「ああーもう、何でもいいや。おい、ちょっと匿ってくれ。」

シヤマシユ「ああ、構わないよ。」

キーラ「パン屋のおやじが来たら、あっちに行つたって言ってくれ。」

シヤマシユ「任せてくれ！ 僕にかかれればパン屋のおやじの一人や二人、見事に煙に巻くつて見せよう！」

キーラ「何言ってるのか分かんねえけど、頼んだ。 はあ……。」

シヤマシユ「随分お疲れのようだね。」

キーラ「ちよつとな……。」

シヤマシユ「良かったらしばらくここで休むといいよ。」

キーラ「いいのか？」

シヤマシユ「ああ。」

キーラはあくびをしながら、奥の部屋に入っていく。シヤマシユは時計を取り出す。

シヤマシユ「そろそろ時間かな。」

ねねが本を閉じる。

ねね 「修一郎さん……。」

シヤマシユ「お帰り。続き読むかい？」

ねね 「うん。」

シヤマシユ「ほら、これだよ。」

シヤマシユは本棚から本を取り出し、ねねに渡す。

ねね 「ありがとう。」

ねねは再び本の世界に入り込む

シヤマシユ「これから、辛い記憶になるかもしれないけど、めげずに頑張ってね。さて。」

シヤマシユは本棚から一冊本を取りだし、ペラペラと捲る。

シヤマシユ「なるほど、天涯孤独の少女か。僕の予定にはなかったけど、さて、これからどうなるか。楽しみだね。ねねさん。」

○シーン4 町の通り 昼

葵と唯慈がやってくる。唯慈は手にキミアオを持っている。

葵 「それ持ってきたの？」

唯慈 「うん、青空の下で読書もいいものでしょ？」

葵 「そうねえ。まあ、今日はあんたが好きに過ごせばいい日だから。」

唯慈 「いつもありがとうね。葵ちゃん。」

葵 「はいはい。」

向かいから、美穂と亘がやってくる。

美穂 「なんでついてくるの？」

亘 「なんとなくだよ。」

美穂 「私の邪魔はしないでよ？」

亘 「お前が変なことしなければな。」

美穂 「あたしは、常識人間だから大丈夫。」

亘 「どの口が言うんだよ……。」

美穂 「あ」

美穂は、葵と唯慈に気付く。唯慈の持っている本に反応する。

美穂 「ねえねえ！」

亘 「おい！」

唯慈 「え？」

葵 「いきなりなんですか？」

美穂 「あなた、その本好きなの？」

唯慈 「キミアオですか？」

美穂 「そう！」

唯慈 「大好きです！」

美穂 「私もよ！」

唯慈 「わあ！ そうなんですわね！」

亘 「お前なあ。」

美穂 「黙りなさい。同志を見つけたら声をかけるのが常識でしょ。」

亘 「どこの世界の常識だよ……。すみません、うちの連れが。」

葵 「いえ。唯慈も楽しそうだし。」

美穂 「こんなところで桜由樹ファンに出会えるなんて、友達になりましたよう！ 私は

遠藤美穂！」

唯慈 「高梨唯慈です。」

葵 「良かったね唯慈。」

唯慈 「うん！」

向かいから、ふらついてる行人がやってくる。

行人 「はあ、はあ、うっ……。くそっ。」

気付いた唯慈が、行人の下へかけつける。

葵 「唯慈!!」

唯慈 「あの、大丈夫ですか？」

葵 「あんたは本当に。」

行人 「はあ、はあ。ああ、大丈夫だ。う。」

行人はそのまま座り込む。

葵 「あの看護師です。気分が悪いんですか？」

行人 「大丈夫だ……。構わないでくれ……。」

行人は、唯慈が手に持っているキミアオの本に気が付く。

行人 「……。それ……。」

唯慈 「これ？」

行人 「そんな本、まだ読んでののか？」

唯慈 「はい、愛読書ですから。」

行人 「あんた、変わってるな。」

唯慈 「え……。」

美穂 「ちよっと、何その態度！」

行人 「そいつは、世間の評価に耐えられなかった出来損ないだ。誰にも、書くことを望まれなかったんだよ！」

美穂 「ああん？ この野郎！ 好きかって言いやがって！ あたしが先に眠らせてやろうか!!」

亘 「やめるばか！」

行人はそのまま気を失ってしまう。

唯慈 「葵ちゃん！」

葵 「とりあえず、病院に運びましょう。お二人手伝ってもらえますか？」

美穂 「えー、こんな奴ほっとけばいいでしょ。」

亘 「馬鹿言うな。ほら、そっちもて。」

葵は行人の手荷物を調べ、健康保険証を探す。

葵 「あった。桜庭行人さんね。急ぎましょう。」

美穂 「えー。」

美穂と亘で行人を担ぎ、その場を去る。

○シーン5 和樹の部屋 夕方

和樹は小説モモを持っている。

和樹 「あの頃に戻りたい……。。」

インターフォンが鳴り、柳田が現れる。和樹が出る。

柳田 「お久しぶりです。」

和樹 「また来たんですか。」

柳田 「行人君はどうされてますか？」

和樹 「どうもありません。行人はもう書かない。あなたもしつこいですよ。」

柳田 「彼の才能は本物です。」

和樹 「うるさい。行人はずっと苦しんでいる。これ以上追い詰めないでいただきたい！」

柳田 「7年前の事件ですか。」

和樹 「あなたには関係のないことだ。」
柳田 「……気が変わりましたら、いつでもご連絡ください。」
和樹 「もう、帰ってください！」

柳田は一礼し、その場を去る。

和樹 「はあ……。」

沙月が和樹の横から顔を出す。

沙月 「懐かしー！ モモだー！」
和樹 「……へ？」
沙月 「和樹君？」
和樹 「……沙月？」
沙月 「はい、沙月です。」
和樹 「本当に……？」
沙月 「うん。」
和樹 「沙月！」

沙月を抱きしめようと手を伸ばすが、すり抜けてしまう。

和樹 「え……。」
沙月 「あー、死んじゃったのは本当だからさ。今の私は、お化け的な？」
和樹 「そんな……！」
沙月 「ごめんね。」
和樹 「……。そんな顔で、謝らないでくれよ。」
沙月 「ねえ、行人君はどうしてる？」
和樹 「ああ、そうだな……。えっと……。」
沙月 「仲悪いの？」
和樹 「……ああ、最悪さ。」
沙月 「そっか。」
和樹 「すまない。必ず幸せにすると誓ったのに。」
沙月 「私は幸せだったよ。それにこうしてまた会えた。神様に感謝しなくちゃ。」
和樹 「僕は……、君に死んでほしくなかった……。」
沙月 「そういう運命だったんだよ。」
和樹 「……。」
沙月 「先に進もう。」
和樹 「無理だ。」
沙月 「無理じゃないよ。二人とも、まだ生きてるんだから。」
和樹 「……。」

沙月 「あのね……。話したいことがたくさんあるんだ」
和樹 「……。ああ。」

沙月と和樹は家の中に入っていく。

○シーン6 行人夢 学校の図書室 昼

昼休み学校の図書館で本を読んでいる行人。他の生徒の姿はない。本を読んでいる行人に悠里が近づいていく。

悠里 「ねえ。」
行人 「……。何?。」
悠里 「藍田悠里。図書委員だよ。」
行人 「何の用?」
悠里 「それ、何読んでるんだ?」
行人 「……。モモ、だけど。」
悠里 「ミヒヤエル・エンデの?」
行人 「そうだけど。」
悠里 「へえ。」
行人 「それだけ?」
悠里 「いや、本題はこれさ。」

悠里はポケットから、畳まれたノートの切れ端を取り出す。もとはクシヤクシヤにされたものなのか、紙はよれている。

行人 「……。」
悠里 「開いてみて。」

行人は紙を開いて中を見してみる。そこには、かつて行人が書いて捨てた小説の一説が載っている。

行人 「何で。」
悠里 「ねえ、これの続きはないの?」
行人 「え?」
悠里 「続きだよ続き。」
行人 「あるわけないだろ。」
悠里 「ええ。面白かったんだよお。続きが読みたいい。」
行人 「こんなただの落書きだろ。書き方も分かんねえし。」
悠里 「だったら、あたしがちゃんとした書き方教えてあげるからあ!」
行人 「お前が?」
悠里 「ああ! これでも小説家かつこ自称だ。」

行人 「自称かよ……。」
悠里 「桜庭君。小説って何だと思う？」
行人 「なにつて。ストーリーとかを、文字で表現したもの？」
悠里 「そう。表現だよ！」
行人 「はあ？」
悠里 「表現！ それは芸術なんだ！ 小説は文字を手段にした芸術なんだ。そしてこの小さな紙切れに書かれた一つの世界の断片。この世界をさらなる芸術へと昇華できるのは作者だけなんだ！ 作者のメッセージ、価値観、伝えたいこと！ それを持っているのは、桜庭君！ 君だけなんだ！ 他の誰かが書いたのなんて贋作だ！ あたしは君の書いた物語が読みたいんだよ！」
行人 「そ、そうか。メッセージと伝えたいことって同じだと思うぞ。」
悠里 「細かいことはどうでもいいんだよ！」
行人 「あ、そう……。」
悠里 「で、書いてくれないのか？」
行人 「いや、そんな急に……。」
悠里 「書いてくれるだろ？」
行人 「だから……。」
悠里 「書いてくれ！」
行人 「……。わ、かったよ。」
悠里 「やったー！」
行人 「その代わり、つまらなくても文句言うなよ！」
悠里 「もちろんだよ。その時は素直につまらないって言ってあげる。」
行人 「それ文句じゃ……。」
悠里 「感想だよ。」
行人 「あ、そう……。」
悠里 「早速、あたしの家に行こう！ ほら！」
行人 「おい、引っ張るな！」

悠里は先に行き、行人が一人が佇む。

行人 「……。」

○シーン7 高梨病院の病室 夜

経過観察をしている修一郎。行人が目を覚ます。

行人 「悠里……。」

修一郎 「目が覚めたかい。」

行人 「ここは……。」

修一郎 「病院だよ。君は倒れてここに運ばれたんだ。覚えてない？」

行人 「……。思い出せねえ。」
修一郎 「一時的な記憶障害だろう。少し休めば大丈夫だよ。」
行人 「そう、ですか。」
修一郎 「悪いと思っただけど、君の身分証見せてもらった。桜庭行人君。」
行人 「ああ、いえ……。」

病室の扉が開き、唯慈と葵が入ってくる。

唯慈 「良かった。目が覚めたんですね。」
行人 「誰？」
唯慈 「覚えてないの？」
修一郎 「私の娘だ。君をここへ運んでくれたんだよ。」
行人 「そうだったのか。迷惑かけた。」
唯慈 「全然、医者の娘ですから。」
葵 「そうじゃないでしょ。」
行人 「え？」
葵 「あなた、謝りなさい。」
行人 「は？」
唯慈 「私は、いいから！」
葵 「唯慈の大好きなもの否定されて、黙ってられない。」
修一郎 「葵ちゃん。患者さんだよ。」
葵 「……。すみません。」
行人 「あの、何の事か……。」
唯慈 「お兄さんは、この人の事が嫌いなんですか？」

唯慈は行人にキミアオを見せる。

行人 「……！」
葵 「あなたは気を失う前に、この本の作者の事ぼろくそに言ったのよ。」
行人 「……。ああ、そいつは嫌いだよ。二度と、名前も本も見たくなくらいにわな。」
葵 「あんたね！」
唯慈 「なんでですか？」
行人 「あなたに関係ない。助けてくれた事は感謝してる。」

行人は帰ろうとする。

修一郎 「帰るのかい？」
行人 「お世話になりました。ありがとうございました。」

行人は出ていく。

唯慈 「……。」

葵 「態度悪！」

修一郎 「何か事情があるんだろう。唯慈が気にすることじゃないよ。」

唯慈 「うん……。」

三人は病室から出ていく。

○シーン8 図書館

ねねは本を読んでいる。シヤマシユが入ってくる。

シヤマシユ「やあ、ねねさん。ご機嫌なお兄さん！ 正義と真実と善良なる太陽的な冥界の神様、シヤマシユさんだよー！ さて、占いの神のシヤマシユさんが、ねねさんの今日の運勢を見てあげよう！」

ねね 「……。」

シヤマシユ「昔住んでたところだと、動物の内臓で占うとかあるんだけど、あれグロテスクで僕苦手なんだよね。だから、キレイなお星さままで見てあげよう！ ねねさんの運勢は……大吉！」

ねね 「……。」

シヤマシユ「ま、星見えないけどね。……。」

寝起きたキーラがやってくる。

キーラ 「……。」

シヤマシユ「やあ、おはよう。いい夢見られたかい？」

キーラ 「……。お前、むかつくな。」

シヤマシユ「おっと、余計なことを言ったようだね。」

キーラ 「……あいつ。ずっと本読んでんのか？」

シヤマシユ「ああ、そうだね。ねねさんは今大切は時間を過ごしているんだ。」

キーラ 「本読むのが大切な時間ってよく分かんねえな。」

シヤマシユ「この本は特別だからね。」

キーラ 「……本が浮いてるように見える。」

シヤマシユ「ああ、あれかい？ 綺麗だろ？」

キーラ 「……。」

扉が開き、唯慈が入ってくる。

唯慈 「あれ、え？ なにここ？」

シヤマシユ「来たね！ ようこそ僕の図書館へ！」

辺りを見回す唯慈

唯慈 「本が浮いてる……？」
シヤマシユ「さあ、一緒に記憶の旅に出かけよう！ 酔い止めは持ってるかい？ ここで吐かれると片づけるのは僕だからね！ あっはっはっはっは！」
唯慈 「なんなの……、こい。」

○シーン9 桜庭家。夜

家に帰ってきた行人。和樹が出迎える。

和樹 「遅かったな」

行人 「なんだよ。」

和樹 「何してたんだ？」

行人 「はあ？」

和樹 「夕飯、出来てるぞ。」

行人 「……。」

行人は無視をし、和樹の横をすれ違い家に入っていきこうとする。

和樹 「もう書かないのか？」

行人 「……。は？」

和樹 「小説はもう、書かないのか？」

行人 「……。なんなんだよ今日は。どいつもこいつも……。」

和樹につかみかかる行人

和樹 「うっ！」

行人 「お前らが俺の事を望まなかったんだろ！ 一度売れただけで天才だの、文豪だのもてはやして、書けなくなったとたん捨てたのはお前らだろうが！ 悠里が死んだのだって、……。」

和樹 「待て、行人……。」

行人 「金ならあるだろうが！ お前らが散々もてはやした作品に払った金がよ！ 何の文句があるんだ！ 俺に何を望んでんだよ！」

和樹を突き飛ばし、行人は自分の部屋に向かう

和樹 「行人！」

沙月が入ってくる。

和樹 「何を……か……。」

沙月 「和樹君……。」

和樹 「やっぱり僕には……。」

沙月 「大丈夫だよ。」

和樹 「僕が何をしたのか君は知らないんだ！」

沙月 「……。」

和樹 「こんなの、僕がそばにいるべきじゃないだろ！」

和樹は自分の部屋へ戻っていく。

沙月 「いつだって誰かを想っている和樹君が、私は好きなんだよ。」

沙月は行人を追いかけていく。

自分の部屋に戻った行人。

行人 「次から次へと、何年前だと思ってたんだ！ 今更なんてほじくり返すんだよ！
せつかく……。忘れ始めたのに……。」

○シーン10 行人の夢。学校の屋上 夕方。

白昼夢。行人の目の前には屋上のフェンスの向こうを眺めている悠里。

悠里 「やあ。来てくれたか。」

行人 「なにしてたんだ、あぶねえぞ。手紙で呼び出しとか、どういう風の吹き回しだ？」

悠里 「それはね賭けだったのさ。行人が来るかどうかのね。」

行人 「賭けね。最新の短編はまだ書いてないぞ。」

悠里 「分かってるよ。今は忙しいだろう？」

悠里は、キミアオの本を取り出す。

悠里 「本の売れ行きはどうだい？ 桜由樹先生？」

行人 「やっぱばれたか。」

悠里 「君の書いた文章を見分けられないわけがないだろう？」

行人 「そりゃあそうか。で、どうだったんだよ。」

悠里 「ん？」

行人 「文句だよ。いつもみたくなんかあんだろ？」

悠里 「感想と言ってくれ。そうだね。これに関しては大衆が認めてしまっているから、
私が何を言ってもただのアンチにしかならないだろう。」

行人 「いまさら何言ってるんだ。」

悠里 「んく！ いい夕焼けだ！ 見てごらんよ。あそこ、夜と昼の狭間。下には太陽が
まだ出ているのに、上の方はどんどん暗くなって、オレンジとパープルのグラデーションが

とつても美しい。そうは思わないか？」

行人 「……おー。」

悠里 「この景色を見ても何も感じないかい？」

行人 「いや、きれいだとは思うけど、別にいつも見てるし。」

悠里 「そうだね。いつも見慣れた風景だ。でもほら、行人の眼には、今、見慣れた風景の他に私も写ってるだろう？」

行人 「自分が写ってるから更に綺麗だったか？」

悠里 「それもいいね。見惚れるだろ？」

行人 「おい、いい加減戻れよ。」

悠里 「でもね行人、ほんの少し変化の変化があれば、物事はそこから段階的に大きく変わっていくんだ。行人。素敵な物語をたくさん書いてくれよ。バイバイ。」

行人 「は？」

悠里は、屋上から飛び降りる。

行人 「悠里!!」

悠里はいなくなり、その場には行人だけになる。

行人 「分かってるよ……。悠里が死んだのは誰でもない……。俺のせいだ……。」

体を抱え、膝をつく行人。目の前から消える悠里

行人 「……。」

後ろから沙月が現れて、行人を抱きしめる。

行人 「……。暖かい。」

沙月に抱きしめられる。暗かった行人の世界がだんだんと明るくなっていく。

行人 「なんだ……?」

沙月 「もう一度、あの図書館に行つて。」

行人 「……。」

行人は立ち上がり、図書館に向かって歩き出す。

○シーン11 図書館

シャマシユは、唯慈を椅子に座らせる。ねねは変わらず本を読んでいる。

シヤマシユ「さて、唯慈ちゃん。キーラちゃん。二人ともよく来てくれた。」
唯慈 「なんで名前を？」

シヤマシユ「僕は占いが得意だね。見たらわかるんだ。」

唯慈 「占いなんてレベルじゃ……。」

キーラ 「で？」

シヤマシユ「ん？」

キーラ 「なんだよ記憶の旅って。」

シヤマシユ「ああ、ちよつと待って。もうすぐ来るから。」

シヤマシユは時計を見ている

キーラ 「何が来んだ？」

行人が扉を開けてやってくる。

シヤマシユ「やあ！ また来てくれてうれしいよ！」

行人 「あんた……。」

唯慈 「え？」

キーラ 「てめえ!!」

行人 「なんだお前？」

キーラ 「あ？ 覚えてねえとはいい度胸じゃねえか！」

行人 「いつからここは託児所になったんだ？」

キーラ 「ガキじゃねえ！ もう 14だ！」

行人 「ガキじゃねえか。」

唯慈 「やめてください！」

行人 「……ちっ。」

シヤマシユ「僕が呼んだんだ。」

行人 「どういうつもりだ？」

シヤマシユ「必要だからだよ。彼女の為に、君にもね。」

行人 「……。」

シヤマシユ「さて。よく来てくれたね。改めて僕はここの管理人シヤマシユだ。ここは愛を
忘れた者が迷い込む図書館だよ。」

唯慈 「愛を忘れた者？」

シヤマシユ「そう、人は善人であれ悪人であれ、愛を貫って生まれてくる。しかし、環境な
どの問題により、愛を忘れてしまう人がまれにいるんだ。」

キーラ 「胡散臭。」

シヤマシユ「そして、そういう人物を僕が気分次第でこの図書館へ招いてる。ま、たまにイ
レギュラーもあるけどね。それはご愛嬌。」

唯慈 「え、それって誘拐なんじゃないですか！ ちゃんと、帰れるんですか？」

シヤマシユ「当然の疑問だ。ではこちらから質問。君たちは帰りたいのかい？」

唯慈 「当たり前です！ 家族が心配します！」

シヤマシユ 「君は？」

キーラ 「別に……。」

シヤマシユ 「あつはつは、心配しなくても、自分で扉を開けば、元居た場所に帰れるよ。その後は同じように、扉をここへ来たいと望んで開けば、図書館へつながるよ。」

唯慈 「良かった……。」

行人 「おい、余計な説明はいい。さっさとよこせ。」

シヤマシユ 「やれやれ、せっかちだねえ。はいこれだよ。」

シヤマシユは行人、キーラ、唯慈に本を渡す。唯慈は本のタイトルを見る。

唯慈 「読めない……。」

キーラ 「おい、俺は文字読めねえって。」

シヤマシユ 「大丈夫大丈夫。騙されたと思って開いてごらんて。」

キーラは面倒くさそうに本を開く。

キーラ 「なんだよこれ、なんも書いてねえじゃ……。」

キーラはイワンの記憶を見始める。

○シーン12 イワンの記憶 ロシア路上 夜

場面が変わり、キーラの目の前がイワンの記憶の世界に変わる。目の前にはイワンとマクシムがいる。

キーラ 「なんだ？」

マクシム 「都合がよすぎないか。」

イワン 「すまない。」

キーラ 「ジジイ？」

マクシム 「おまえが、私に何をしたのか。忘れたとは言わせないぞ。」

イワン 「申し訳ないと思っている。」

マクシム 「今更そんなこと……。許せるわけがないだろう！」

イワン 「頼む！ 助けてくれ！」

マクシム 「ふざけるな！ 消えろ！」

イワン 「マクシム！」

マクシムは踵を返し去っていく。イワンは追いかけていく。

○シーン13 図書館

シヤマシユによって本を閉じられる。

キーラ 「ハッ!!」

シヤマシユ 「最初はこれぐらいしようね。」

唯慈 「だ、大丈夫?」

キーラ 「おい! なんだよ今の!」

シヤマシユ 「見た通りだよ。」

キーラ 「ジジイと、知らねえ男がいた。あんなジジイ、俺は見たことねえ!」

シヤマシユ 「そうは言っても、実際に起きたことなんだ。」

キーラ 「俺はそんなこと知らねえ!」

行人 「……。」

唯慈 「なんなんですか、この本。」

シヤマシユ 「これは、人類の営みを記録し、僕が集めた本さ。」

唯慈 「人類の営み?」

シヤマシユ 「この図書館は過去から現在に至るまで、世界中の人間の記憶を保管した場所。アカシックレコードといっても過言ではない。そして、この本は君の育ての親の本だよ。」

それぞれ自分の本をみる行人、唯慈、キーラ。

キーラ 「……。」

行人 「そういう事か……。」

唯慈 「あの、それなら私のは?」

シヤマシユ 「それは開いてみてからのお楽しみさ。」

唯慈 「そうですか……。」

行人は立ち上がり、扉から出ていこうとする。

シヤマシユ 「もう行っちゃうのかい?」

行人 「用は済んだからな。これ以上いても、ガキがうるせえだけだ。」

キーラ 「ああ?」

行人 「見てると、イライラすんだよ。」

キーラ 「何が気に食わないのか知らねえけどよ、まじうぜえぞ?」

行人 「ああ、気に食わねえな。だれも自分の事なんか分からねえって態度が尚更鼻につく。」

キーラ 「てめえ……。」

シヤマシユ 「あー! 行人君ー! まだ大切なことやってないよー!」

行人 「あ?」

キーラ 「なんだよ! お前!」

シヤマシユがキーラを制止する。

シヤマシユ 「まあまあ。ほら唯慈ちゃんに謝りたいことがあるんだろう?」

行人 「は？」
唯慈 「え？」
シヤマシユ「行人君が地味に今朝の事を引きづってるみたいでねえ。唯慈ちゃんを見るとちよつとソワソワするらしいんだ。」
行人 「なんで……?!」
シヤマシユ「ちようどいいだろう。後悔つてのはさっさと無くしておくに限るよ。」
唯慈 「何のことですか？」
シヤマシユ「今朝、行人君に好きな小説家をめちやくちやに言われたらろう？ 彼なりに反省しているようなんだ。」
行人 「……。」
唯慈 「ああ！ 気にしてたんですか？」
行人 「……。」
唯慈 「やっぱり、嫌いなのは変わらないんですか？」
行人 「ああ、俺はそいつが嫌いだ。2作目なんか最悪だ。」
唯慈 「そんなことないです！ ちゃんと面白かったです！ 確かに、2冊目は1冊目に比べて雰囲気も全然違いました。でも、桜先生の想いがどんどん入ってくるようで、暗い内容でも、私は大好きなんです。」
行人 「……そうか……。」
唯慈 「えっと、すみません。なんか語っちゃって……。」
行人 「いや……。」
シヤマシユ「良かったじゃないか！ 君がどう思うとファンは君の事をちゃんと評価してるんだ。」
唯慈 「え、ファンって……。」
行人 「黙れ。」
シヤマシユ「その本の作者は今君の目の前にいるよ。」
唯慈 「え……。」
行人 「おい、シヤマシユ!!」
シヤマシユ「桜庭行人君が、君の大好きな元小説家、桜由樹なんだよ。」
唯慈 「え……？」
行人 「お前……。本当にどういうつもりだ。」
シヤマシユ「向き合う時が来たんだ。」
行人 「ふざけんな。それを決めるのはお前じゃ……。」
唯慈 「本当なんですか？」
行人 「……。」
唯慈 「本当に、桜由樹先生……。なんですか？」
行人 「……ああ、そうだよ。」
唯慈 「……。なんで、自分の事なのに、そんなに嫌いなんですか？」
行人 「なんで？ 分からないか？」
唯慈 「それは……。」
行人 「1作目。『君だけが知ってる青』は世間の評価が良すぎたんだ。あんなのはたま

たまだ。俺の実力じゃない。でもそれを実力だと思い込んだ。実力と評価がちぐはぐなまま2作目を出せば、結果は御覧の通り。俺は大バッシング。つまらん。ゴーストライターだ。小説家なんてやめた方がいい。散々な言われようだ！それで、それを見返すこともなく、逃げ出した。そんな奴、好きになれるわけがないだろう！」

唯慈 「……。」

行人 「俺は、実力もないただの、くそ野郎だ……。」

キーラ 「さつきから聞いていればお前むかつかない。」

行人 「あ？」

キーラ 「みんなが自分の事を好きになってくれなかったから、そんな自分が嫌いだったことじゃねえか。情けねえ。」

行人 「てめえに何が分かる！」

キーラ 「誰も自分の事なんか分かんねえか？」

行人 「……。」

キーラ 「そんなねえちゃんいじめて、何が楽しいんだよ。」

キーラは立ち上がり、扉の方へ向かう。

シヤマシユ「キーラちゃん。」

シヤマシユはキーラの本をキーラに渡す。

シヤマシユ「これは君に必要だろう。」

キーラは少し考えた後、本をひったくるように奪い、出ていく。

行人 「……。」

唯慈 「あの……。」

行人 「あ？」

唯慈 「桜庭さんは、どうして、この図書館に来たんですか。」

行人 「……。」

唯慈 「誰の記憶が必要なんですか？」

行人 「それを知ってどうすんだ？」

唯慈 「私は……。」

行人 「用は済んだ。じゃあな。」

シヤマシユ「君は本当に愛想がないねえ。もう少し人にやさしくした方がいいと思うよ。」

行人はシヤマシユの言葉を無視して、扉を開ける。

唯慈 「待って！」

扉が閉まる前に、行人を追いかけて唯慈も出ていく。

シヤマシユ「あー！ 本置いてってるじゃないか！ まったくもうー。」

ねねが本を閉じる。

シヤマシユ「お！ お帰り！ どうだった？」

ねね「……。まだ自覚できないかな。」

シヤマシユ「そうだろうね。知識と経験は違う。自覚となると、更に難しいだろう。」

ねね「うん。」

シヤマシユ「だが、それももうすぐ終わる。」

シヤマシユは3冊目の本をねねに渡す。

シヤマシユ「その本を読み終えたら、ねねさんの時間は一気に進むだろう。」

ねね「うん。分かってる。」

シヤマシユ「心の準備は出来てる？」

ねね「まだかな。でも……。後悔はしたくない。」

シヤマシユ「それでいい。僕はそんな人間が大好きだ。じゃ、ちよつと行ってくるね。」

ねね「行ってらっしゃい。」

シヤマシユは唯慈の本を持って、扉を開き出ていく

ねね「最後の本……。よし。」

ねねは本を開き、自分の記憶を見始める。

○シーン14 トウリクシヨン編集部 朝

出勤してくる美穂と亘。

美穂「おはよーございます！」

亘「はよーございますー。」

美穂「あれ？ ふっふっふ、これは編集長の机をあさるチャンス。」

亘「お前殺されるぞ。」

美穂「亘はバカだから知らないだろうけど、鬼の居ぬ間に洗濯っていうのはこういうことを言うのよ。」

柳田「馬鹿はお前だ。」

柳田が現れ、美穂の頭をつかむ。

美穂 「あだだだだだだだ！」
柳田 「上司の机をあさろうとするとはいい度胸じゃないか。よほど残業がしたいらしいな。」

柳田の手から逃れる美穂

美穂 「残業なんてお断りですよ！ この鬼！」

柳田 「昨日一切仕事をしなかつたくせにどの口が言っている！」

美穂 「ばれてる。」

柳田 「ばれないわけないだろう！ 昨日お前らがさぼった分の仕事。終わるまで今日は返さんからな！」

亘 「え!! 俺も!!」

柳田 「当たり前だ！」

美穂 「嫌ですよ！ まだ私は桜由樹に一步も近づいてないんですから！」

柳田 「まだ言ってるのか！ お前はいつたい何度言えば……。」

美穂 「何度言われても変わりませんよ。私は、桜由樹を必ず探し出すんです！」

柳田 「あいつはもう書かかない。書いたとしても、あいつは一度世間の評価を落としたんだ。話題にもならんぞ。」

美穂 「そんなことはありません！ 昨日、同じように桜由樹を好きな人に会ったんです。まだあの人の作品を読みたいと思ってる人は必ずいるはずなんです！」

柳田 「だとしてもだ。あいつの作品を新たにうちに載せる枠などない。」

美穂 「いいじゃないですか！ どうせ編集長も作品が来たら、考えも変わるはずですよ！」

柳田 「あいつはもう書かないと、何度言わせる気だ。」

美穂 「私はあきらめませんよ。」

柳田 「……。仕事は終わらせる。」

美穂 「分かりました。」

柳田は踵を返し、自分のデスクに戻る。

美穂 「ああー！ もう！ 昨日の桜庭行人といい編集長といい、むかつくー！ 亘もそう思うでしょ!!」

亘 「編集長に聞こえるだろう！」

柳田 「おい。」

亘 「すみません！」

柳田 「桜庭行人に会ったのか？」

美穂 「あいつ超むかつくんですよ！ こともあろうか私の目の前で桜由樹の事をぼろつぼろのメタクそにこき下ろしてくれて！」

柳田 「そうか……。」

美穂 「ダメだ。我慢できない。見つけ出して、桜由樹のすばらしさを永々語ってやる！」

美穂がオフィスから飛び出そうとする。

柳田 「遠藤!!」

美穂 「止めても無駄ですよ! 今この怒りをどうにかしないと仕事なんて……。」

柳田 「桜庭行人に関わるな。」

美穂 「なんでですか!」

柳田 「もう一度言う。桜庭行人には関わるな。何もするな。何も言うな。」

美穂 「関われば?」

柳田 「クビの方がまだましだろうな。」

柳田はオフィスから出ていく。

亘 「いい加減にしないと本当にクビになるぞ?」

美穂 「ふっふっふ……。あっはっはっはっは! ざまあみる柳田め!」

亘 「どうした? おかしくなったか?」

美穂 「あの反応! 見た!! あの冷徹な鬼編集長も所詮人の子のようね!」

亘 「それで?」

美穂 「桜庭行人は、桜由樹の関係者よ!」

亘 「はあ。」

美穂 「そうとわかれば、やることは一つ! 行くわよ亘!」

亘 「どこに。」

美穂 「桜庭行人を探しによ!」

亘 「関わるなって言われたばかりだろ!」

美穂 「何とかなるわよ! 走り出したパトスはもう止められないのよ!」

亘 「意味わかんねえよ!」

亘を引きずりながらオフィスを出ている美穂。

○シーン15 夜

本を借りとも外に出てきた行人と唯慈。

行人 「なんでいんの?」

唯慈 「ごめんなさい……。思わず……。」

行人 「はあ……。」

唯慈 「まだ桜庭さんの質問に答えられてなかったから。」

行人 「は?」

唯慈 「私は、別に桜庭さんに何かを望んでなんていません。」

行人 「そんなこと言う為にわざわざ……。」

唯慈 「大切だと思ったから。」

行人 「あんた……。」

唯慈 「唯慈です」

行人 「え？」
唯慈 「もう知らない仲間じゃないんだから、名前で呼んでほしいです……。と思いました
……。いや、忘れてください……。」
行人 「自信なくなるなよ」
唯慈 「すみません……。」
行人 「……考えとく。」
唯慈 「はい！」

目の前に柳田が現れる。

行人 「柳田？」
柳田 「申し訳ない邪魔してしまったかな。」
行人 「なんであんたがここに？」
柳田 「久しぶりだね。行人君。待ってたんだ。」
行人 「待ち伏せの間違いだろ？」
柳田 「そう邪険にしないでくれ。初めまして、私はこういう者です。」

柳田は唯慈に名刺を渡す

唯慈 「文芸雑誌トウリクシオン……え？ トウリクシオンって！」
行人は柳田の名刺を唯慈から奪い、握りつぶす。

行人 「こいつは、俺が桜由樹だったころの、担当編集者だ。」
唯慈 「ええ!!」
柳田 「へえ。随分と仲がいいようだ。彼女さんかな？」
唯慈 「え？」
行人 「話を逸らすな！ 今更何の用だ。俺はもう桜由樹じゃないんだぞ。」
柳田 「私の部下が君に粗相をしたと聞いたのでね。一言謝っておこうと思ったのさ。」
行人 「部下あ？」
柳田 「遠藤と西村だ。」
行人 「知らねえ。」
唯慈 「あ、桜庭さんが公園で倒れたときのですよ。」
柳田 「君も一緒だったか。うるさかっただろ、特に遠藤。あいつは本当に……。」
行人 「違うだろ。」
柳田 「ん？」
行人 「7年も音沙汰名の無かったお前が、今更そんなことで俺の目の前に現れるわけ
がねえ。」
柳田 「随分口が悪くなったね。」
行人 「おかげさまでな。」

柳田 「確かに、部下の事はただの口実だ。だが、私は7年間君を放置していたわけではない。」

行人 「はあ？」

柳田 「私は、定期的に君の家に行っていた。」

行人 「なんだと？」

柳田 「まあ、君のお父さんに毎度門前払いを食らっていたけどね。」

行人 「あいつが……？ ありえねえ。」

柳田 「信じなくてもいい。だが、これから言う事はすべて信じてほしい。」

行人 「なんだよ。」

柳田 「私は出世して編集長になった。」

行人 「だから？」

柳田 「つまり、トウリクシヨンの編集全権を私が持っている。」

行人 「もったいぶるな。」

柳田 「……君の枠は、常に残してある。」

行人 「……は？」

柳田 「君が作品を用意すれば、いつでも掲載することが出来る。」

行人 「待って待って。お前は俺に、もう一度書けっというのか？」

柳田 「そうだ。」

唯慈 「え。」

行人 「……。冗談だろ？」

柳田 「本気だ。君は必ずこの国を代表する作家になる。」

行人 「頭おかしいよお前。」

柳田 「自覚はしている。」

行人 「初めて書いた話がたまたま当たっただけだろ？」

柳田 「だとしてもだ。」

行人 「あんな、何も知らないまだケツの青いガキが、妄想並べた寒い話が……、この国を代表する？ そんなことある訳ねえだろ！」

柳田 「そんなことはない！ 君には作家としての特出した才能がある！」

行人 「ねえよ！」

柳田 「ある！」

行人 「だったらなんで今書いてない！ 2作目が駄作だったからだろ！」

柳田 「違う！ あれを評価しなかったのは文芸が何たるかを一ミリも知らないただの素人だ！ 瞬間の流行りに踊らされ、食い物のように物語を消費する無能どもだ！ あいつらの評価など考慮するに値しない！」

行人 「なら!! 俺の今までの時間はなんだったんだよ。 7年だぞ！ 7年間無為に過ごしてきたんだ！ この時間は誰が返してくれんだよ！」

柳田 「私はあの時、何の権力も持たない一編集者だった。上の指示があれば従うしかなかった。」

行人 「そんなことが聞きたいんじゃない！」

柳田 「申し訳なかった。」

行人 「……お前が……謝るなよ！ お前が謝ったら誰を恨めばいいんだよ！」

行人はその場から走り去る。

唯慈 「桜庭さん！」

唯慈は行人を追いかける。

柳田 「私は待っているよ。」

柳田もその場から去る。

○シーン16 ロシアモスクワ路上 昼

キーラが入ってくる。本を持っている。寒さで体が震えている。

キーラ 「ちっ……。このままじゃやべえ……。どうにか寒さを……。」

キーラは道の隅っこで丸くなり、寒さを逃れようとする。

キーラ 「俺もここで終わりかも……。ジジイの過去か……。」

キーラはイワンの記憶の本を開く。イワンの記憶の世界へ入る。

○シーン17 イワンの記憶 ロシアの道端 昼

イワンの記憶を見始めたキーラ。一人歩いているイワン。それを眺めている。

キーラ 「ジジイ……。」

そこへ赤ん坊の泣き声が聞こえる。

イワン 「ん？」

イワンは道端に捨てられている籠を見つける。そこにはおくるみに巻かれた赤ん坊の姿。

キーラ 「赤ん坊？」

イワン 「捨てられたのか……。こんな寒い日に。世も末だな。捨てるくらいなら初めから作らなきゃいいだろうに。運が悪かったな。子は親を選べねえ。」

踵を返し、その場から去ろうとするが足を止める。

イワン 「……世も末なのはわしも変わらねえか……。」

戻り、おくるみに巻かれた赤ん坊を抱きあげる。おくるみにはカードが挟まっている。

イワン 「名前か……。捨てたくせにまだ親でいようとするとあな。お前は思う？」

赤ん坊に問いかけるイワン。赤ん坊は笑い声をあげる。

イワン 「わしの事親だと思ってるのか？ やめとけ、わしだつてろくな人間じゃねえんだ。でも、そうだな。これも運命なのかもな。」

イワンはキーラの元の名前が書かれたカードを捨て、籠を拾い上げる。

イワン 「捨てた奴がつけた名前なんていらねえだろ。そうだな……キリールってのはどうだ？ 愛称はキーラだ。もう呼ぶ奴もいねえ俺の名だ。お前にやるよ。」

赤ん坊はうれしそうに笑う

イワン 「俺はもう名前はいらねえ。お前に生きる術を教えてやる。守ってやる。だから、最後にわしをみとってくれや。」

笑顔で話すイワン。

キーラ 「これがジジイ……？」

イワンの記憶が変わる。

イワン 「ああ！ 畜生！ やりあがったなこいつ！ しょんべんひっかけやがって！」

嬉しそうな赤ん坊の声

イワン 「楽しそうな顔しやがって……。まったくこいつは……。」

優しそうな表情のイワン

キーラ 「知らねえ。」

イワンの記憶が変わる。

イワン 「今日はいいい天気だな！ どうだキーラ！」

嬉しそうな赤ん坊の声

イワン 「はっはっは！ そうか気分がいいか！ お前は俺の宝だ！ 元気なガキに育てよう！ はっはっはっは！」

キーラ 「こんなジジイ知らねえよ……。」

よろよると、道端に座り込む。イワンの記憶が変わる。先ほど、キーラが本を読み始めた記憶。本を開いているキーラ。イワンが毛布をもってやってくる。

イワン 「こんなところで寝やがって、死にてえのか。」

キーラ 「ジジイ……？」

イワンはキーラに毛布を掛けてあげる。

キーラ 「あったけ……。」

イワン 「クソガキが。」

イワンはキーラが開いている本を閉じ。横に座り。共に暖を取り始める。

○シーン18 高梨病院 夜

修一郎と葵がいる。神妙な顔つきで話している

葵 「見つかりません。このままじゃ……。」

修一郎 「分かっている！」

葵 「すみません……。」

修一郎 「いや、私こそすまない。」

葵 「いえ……。」

修一郎 「唯慈の寿命は刻一刻と迫ってきている。薬で延命するのも限界だ。見つかり次第、検査し、問題なければ手術を行う。」

葵 「しかし、唯慈の体は……。」

修一郎 「ああ、唯慈は母親譲りの体質で組織がもろい。まるで豆腐を縫っているような高い技術が必要になる。」

葵 「唯慈の手術が出来るのは……。」

修一郎 「考える時間などあるはずもない。」

葵 「……はい。」

修一郎 「とにかく、まず唯慈を見つげるんだ。警察でも探偵でも使えるものは全部使ってくれて構わない。」

葵 「かしこまりました！」

修一郎 「無事でいてくれ……。」

二人は去って行く。

○シーン19 桜庭家 夜

和樹が入ってくる。ひどく落ち込んでいる様子。モモを持っている。

和樹 「沙月……行人……。」

沙月が家に入ってくる。

沙月 「ただいまー！」

和樹 「ああ、良かった……。」

沙月 「どうしたの？ そんなにやつれた顔して。」

和樹 「それは……。」

沙月 「全然、大丈夫だよ。」

和樹 「ごめん……。」

沙月 「私の方こそ、ごめんね。無理させちゃった。私の知らない時間があるのなんて当たり前なのね。」

和樹 「……。」

沙月 「心配しないで。必ず私が家族を元に戻してみせるから。」

和樹 「沙月に言われるとどうにか頑張ってしまおう気がするよ。」

沙月 「そうでしょ。」

シヤマシユが入ってくる。

シヤマシユ「や。」

沙月 「……シヤマシユさん？」

シヤマシユ「久しぶりだね沙月さん。」

和樹 「沙月？」

沙月 「そっか、もうなんだね。」

シヤマシユ「ああ、君が望んだ通りに物語が進んでいる。」

沙月 「ありがとうシヤマシユさん。」

シヤマシユ「契約は覚えているね。」

沙月 「はい。」

沙月は和樹の前に向き直す。

和樹 「誰と話しているんだ？」

沙月 「ごめんね和樹君。楽しい時間は終わりみたい。」

和樹 「え？」

沙月 「止まっていた時間が、物語が動き出すの。語り部を得たこのお話はエンディング

まで向かう。」

和樹 「君は一体……。」

沙月 「ありがとう。本当に短いひと時だったけど、あの頃に戻れたみたいで楽しかった。」

沙月は和樹に背を向ける

シヤマシユ 「いいかい？」

沙月 「はい。」

シヤマシユは和樹の顔の前に手をかざし、和樹は眠りにつく。

シヤマシユ 「これを持って行きなさい。必ず必要になる。」

シヤマシユは唯慈の本を沙月に渡す。

沙月 「分かりました。」

シヤマシユ 「じゃあ、行つといで。」

和樹 「待って！」

和樹は目を覚ます。目の前にいた沙月はいなくなっている。

和樹 「……。夢だったのか……？ いや……沙月……。」

和樹はよろよろと沙月を探しに家を出る。シヤマシユはモモを拾い上げる。

シヤマシユ 「これもいるね。」

シヤマシユは図書館へ戻っていく。

○シーン20 道 夜

走って逃げてきた行人と唯慈。唯慈の息はかなり荒くなっている。

唯慈 「ハア、ハア、ハア……。」

行人 「……。」

唯慈 「桜庭……さん……。」

行人 「……なんだ……。」

唯慈 「私は……桜庭さんに……何も望んでは……いません！」

行人 「何の話だ。」

唯慈 「私は……『君だけが知ってる青』も……2作目の、『いつか手に取るその日に』も！ 大好きなんです！」

行人 「……。」

唯慈 「だから……。自分の事をそんなに……。嫌いにならないでください……。」

行人 「もう……。分かんねえよ……。」

そこへ、美穂と亘がやってくる。

美穂(OFF) 「桜庭行人……」

行人 「は？」

亘 「おい！」

美穂は行人に盛大にタツクルをかます。

行人 「ぐはあ！」

唯慈 「桜庭さん!!」

美穂 「ようやく見つけたわよ！ 桜庭行人！ 飛んで火にいる夏の虫！ さあ、あんなの知ってることを全部話してもらおうわよ！」

亘 「ほぼ初対面の相手にタツクルかますやつがあるかよ！」

美穂 「黙りなさい。これはもう、浮気調査とか、猫探しとかそういう次元の話じゃないの！」

亘 「お前は編集者だろ！」

行人 「お前らは、確か柳田の……。」

唯慈 「遠藤さんに……。西村さん？」

美穂 「唯慈ちゃんこんばんは。尻尾を見せたわね！ やっぱり編集長の知り合いだった！ 桜由樹に関して知っていることを洗いざらい話さない！ そうすれば痛くしないで上げるから！」

亘 「もうタツクルかましてんだよ！」

美穂 「ん!! 唯慈ちゃん!! なんでこいつといるのよ!!」

唯慈 「はあはあ……。えっと……。あはは……。」

亘 「大丈夫？ 息が荒いけど……。」

唯慈 「はあはあ、すみません……。これは持病みたいなもので……。気にしないでください。」

美穂 「本当に？ 大丈夫？」

唯慈 「はい……。うっ!!」

唯慈が胸を押さえながら苦しみ始める。呼吸が荒くなる。

唯慈 「ハッ……ハッ……ハッ……。ゴホッ！ ゴホッ！」

行人 「どうした？」

唯慈 「ハッ……ハッ……。くらば……。さん……。」

美穂 「なにになに!! どうすればいいの!!」

亘 「落ち着けばか！」
唯慈 「すみ……ません……。ゼイ、ゼイ……。」

唯慈は気を失う。

美穂 「ぎゃああ！ 唯慈ちゃん!!」

亘 「黙れ！ おい、あんた、そっち持て！」

行人 「あ、ああ。」

亘と行人で倒れた唯慈の体を支える。

美穂 「てんばつてないでタクシーでも拾って来い！」

美穂 「分かったわ！」

走り去る美穂。それを追うように、唯慈を支えながら亘と行人はいなくなる。

○シーン21 ロシア路上 夜

道端で寝ているキーラとそばに座っているイワン。

キーラ 「ジジイ……？」

そこへマクシムと職員がやってくる。

イワン 「来たか……。」

マクシム 「ようやくその子を手放す気になったか。」

イワン 「ああ。」

マクシム 「そうか。」

イワン 「すまんかったな。わしのわがままを聞いてもらって。」

マクシム 「仕事だ。お前の事など関係ない。保護してくれ。」

職員 「はい。」

職員に抱きかかえられるキーラ。持っていた本が落ちる。

キーラ 「……なんだ……お前ら……。」

イワン 「マクシム。すまなんだ。」

マクシム 「……。」

キーラ 「待てよ……。」

イワンはキーラに近づく。

イワン 「幸せになれよ。」
キーラ 「ジジイ……。」

マクシムと職員はキーラを連れ、いなくなる。イワンはもと来た方向へ戻っていく。
シャマシユが現れ、キーラの本を回収していく。

○シーン22 高梨医院 唯慈の部屋 夜

病院に唯慈を担ぎこんだ美穂と亘と行人。葵と修一郎が迎える。

葵 「唯慈！」

唯慈 「……ごめんなさい……。」

修一郎 「謝らなくていい。とにかく横になりなさい。」

唯慈 「はい……。」

亘 「すみません……自分たちがついていながら……。」

美穂 「唯慈ちゃんは大丈夫なんですか!!」

修一郎は触診をする。

修一郎 「幸い、軽い発作のようだ。体力を使いすぎたのだろう。休めばよくなるはずだ。」

美穂 「良かったあ。」

修一郎 「唯慈、なぜ病院を抜け出したんだ？ それも一日中。それがどういう意味かわからないわけじゃないだろう？」

唯慈 「……。はい、すみませんでした。」

修一郎 「……いや、怒ってはいないよ。無事でよかった……。皆さんもありがとうございしました。娘を見つけてくれて。おかげで命をつなぐことが出来ました。」

亘 「やっぱり、重い病気なんですか？」

修一郎 「ええ。命にかかります。」

亘 「そうですか……。」

修一郎 「私は、明日の仕事の準備がありますので、失礼しますね。お帰りの際は受付に伝えてください。葵ちゃん一緒に。」

葵 「はい。」

葵と修一郎は部屋を出ていく。

美穂 「なんかあの人冷たくない？」

亘 「馬鹿やめろ。」

唯慈 「お父さん忙しいから……。」

美穂 「唯慈ちゃんは今にも悪くないのよ。ゆっくり休んでね。」

唯慈 「あはは。」

美穂 「で、あなたはなんで唯慈ちゃんといいたの？」

唯慈 「桜庭さんは、私が付きまどってただけで……。」
美穂 「唯慈ちゃん！ お静かに……。」
唯慈 「あ、はい……。」
美穂 「桜由樹と関係があるの？」
行人 「なんでそう思う。」
美穂 「二人の接点なんて、それぐらいしかないじゃない。あんた、桜由樹の関係者でしょ？」
行人 「なんで桜由樹を探してんだ。」
美穂 「私がファン1号だからよ。」
行人 「は？」
美穂 「私は、ファン1号として、桜由樹に言ってあげたいの。あなたの作品はどちらも素晴らしい。あなたは何も悪くないって。」
行人 「はっ。俺は悪くないか……。」
美穂 「あ？ あんたの事なんか話してないわよ。」
行人 「俺が桜由樹だよ。」
美穂 「そうね。あなたは桜由樹よ。」
唯慈 「え？ 知ってたんですか？」
美穂 「え？ ええええええええええ!!」
亘 「うるさい。病院だぞ。」
美穂 「だって、名前違うじゃない！ 女の子じゃないじゃない！」
亘 「ペンネームだろ。」
美穂 「こ、こんな奴が桜先生？ 嘘だ。私のイメージはもっと可憐で清楚で図書館で紅茶飲みながらごめん遊ばせて言ってるようなお嬢様だと思ってたのに……。」
行人 「……悪かったな。」
美穂 「……238ページ」
行人 「あ？」
美穂 「キミアオの238ページ 17行目。主人公の陸がヒロインの由利に言った言葉は？」
行人 「……。『バカなのは僕たちだ。由利がこうやってみんなを集めてくれたんだ。由利のおかげで一生消えない思い出が出来た。ありがとう』」
美穂 「キミアオの347ページ。由利が一人公園でつぶやいた言葉は？」
行人 「『みんななら見ることが出来るよ。だから、絶対に後悔しないで。いっぱい練習して。最高のステージを見せて。私も絶対見るから。』」
美穂 「……。28ページ。」
行人 「おい、まだ続けるのかよ。」
美穂 「『いつか手に取るその日に』の!! 28ページ。主人公の奏多が、父親からの贈り物ももらった時に心で思っていた言葉は？」
行人 「……。」
美穂 「答えて。」
行人 「『こんなもので僕の機嫌を取ろうとする。浅はかだ。虫唾が走る。僕がその気に

なれば、父親であろうと陽炎のごとく消え去ることを、この人は分かっているのだ。なんて、むなしい。』

美穂 「本当に……、本物……?。」

唯慈 「すごい……。」

亘 「流石作者ですね。」

行人 「こいつの方がすごい。ふつうこんなじゃ覚えてないだろ。」

美穂 「あの本は、私の人生を変えてくれたの。だから、絶対に忘れるわけない。」

行人 「……。ありがとうな。」

美穂 「あの、よかつたらこれにサインを……。」

亘 「目的をはき違えるな。」

美穂 「は!! 私としたことが!!」

行人 「柳田が言ってた通り、うるさい奴らだな。」

亘 「編集長に会ったんですか?」

行人 「ああ、お前らに気をつけるってな。」

美穂 「ああ!! 失礼な上司だな! 帰ったらはったおしてやる!」

亘 「またアイアンクローくらうぞ。」

美穂 「それはいや!」

唯慈 「あはは、本当に賑やかな人達。」

行人 「で、俺に聞きたいことってなんだよ。」

美穂 「……。いつか手に取るその日に。あれを出すまでの間にあんたに何があったの?」

行人 「……ストレートに聞いてくるんだな。」

美穂 「7年越しの質問よ。濁らせる意味がないわ。」

沙月が部屋の隅に現れる。唯慈の本を持っている。

行人 「まあ……、そうだな。」

唯慈 「桜庭さん……。」

行人 「大丈夫だ。今が向き合う時なんだろうな。」

美穂 「聞こうじゃない。」

行人 「俺には、いわゆる小説の師匠って奴がいた。藍田悠里。高校の同級生だ。小説の作法はそいつから教わった。最初は俺が書いた短編をあいつが呼んであいつが文句という感想を言う。それだけだったんだ。自分の書いた話にプライドが出始めた時、俺は悠里に内緒で当時のトウリクシヨンの文芸大賞に描きおろしの長編、『君だけが知ってる青』を応募したんだ。」

唯慈 「あれが初めての長編だったんですか!!」

行人 「ああ。」

唯慈 「すごい……。」

行人 「お前らが知ってる通り爆発的ヒットをした。これで悠里をぎゃふんと言わせられる。ガキのくせに妙な見栄を張ろうとしたのさ。そんな時、悠里は俺の目の前で屋上から自殺した。」

唯慈 「え……？」

行人 「警察の調べでは、家庭も学校も何も問題がなく。遺書すら残っていない。死の理由は全く分からないってことだった。一緒にいた俺も疑われたが、証拠不十分で捕まることはなかった。」

美穂&亘 「……。」

行人 「悠里は、死ぬ瞬間俺にもっと物語を書けって言った。でも……。パソコンでも原稿用紙でも、文章を書こうとすると、あの時の事が蘇って、何もできなくなる……。あいつに内緒にして、あいつよりも早く圧倒的に売れたから。あいつはきつとそれが気に食わなかったんだ。いつか手に取るその日には。死ぬ思いで書いた。でも、俺にはもう小説を書くことは出来ない。」

唯慈 「そんなの、桜庭さんは悪くありません。」

行人 「いや、俺が悪いんだよ。」

唯慈 「だって、桜庭さんは小説を書いて応募しただけじゃないですか！ それが偶然売れただけ。完全に嫉妬ですよ！」

美穂 「私もそう思うわ！ その女はクソよ！」

亘 「お前はもつと言葉を選べないのか。」

美穂 「黙りなさい！ だって絶対わざとじゃない！ 桜庭行人の目の前で自殺するって決めたから屋上に呼び出したんでしょ！ 計画的犯行なのよ！」

行人 「なんでそんなことする必要があるんだ？」

美穂 「そんなの、分かんわよ。」

行人 「……。」

唯慈 「たとえどんな理由があったとしても、桜庭さんが悪いことなんて絶対にないです。」

行人 「なんでだよ。俺を理由にして死んだんなら、俺が殺したようなものだろうが！」

唯慈 「直接手を出したわけじゃないでしょう？」

行人 「……。」

唯慈 「桜庭さんは、立場が逆だったら、その子の前で自殺したんですか？」

行人 「する訳ねえだろ！ あいつの書いた話は、絶対に俺より面白んだ。俺が売れたんだからあいつが売れないわけがないんだよ！」

唯慈 「だったら、絶対桜庭さんは悪くない！」

行人 「じゃあ、あいつはなんで……。」

唯慈 「それは、分からないです……。」

美穂 「案外本当に嫉妬なんじゃないの？」

亘 「お前慰めたいのか追い詰めたのかどっちなんだよ。」

美穂 「私は、私の思った通りの事を言うだけよ。それが私の正義なの。だから、男のくせにいつまでもうじうじしてんじゃねー！」

美穂は行人の背中を思いっきり叩く。強く響く音がする。

行人 「いってえな!!」

唯慈 「桜庭さん!!」

美穂 「しゃんとしなさい。あんたのファンは少なくとも私ともう一人いるんだから。」

行人は唯慈の事を見る。

行人 「ストーリーカーの間違いだろ。」

美穂 「喧嘩売ってんのか!」

亘 「やめる」

美穂を取り押さえる亘。

行人 「ありがとうな。」

唯慈 「吹っ切れました?」

行人 「まだ、本は書けない。でも、俺の話を求めている奴らがいるのは分かった。だから、もう一歩だけ、だけど、絶対に超えられないと思っていた一歩を踏み出してみる。」

唯慈 「キミアオの352ページですね。」

行人 「ああ。」

行人は椅子に座り本を両手に構える

行人 「悪い。ちよつと見守ってくれるか。」

唯慈 「はい。」

美穂 「よくわかんないけど、分かったわ!」

行人 「行ってくる。」

行人は本のページを捲る。沙月がそばにより、そつと唯慈の本を置く。行人は悠里の記憶の世界へと入っていく。

○シーン23 悠里の記憶 夜

行人の本『君だけが知ってる青』を読んでいる悠里。それを背後から見ている行人。

行人 「これが……、悠里の記憶……。」

悠里 「この文体……。この展開……。間違いない、行人が書いた本だ。」

行人 「……。」

悠里 「ふふふふ……。」

行人 「悠里?」

悠里 「素晴らしい! こんな長編をこんなクオリティで書けるようになったんだね! 私に内緒でこんな作品を……。すごいよ行人! デビューから最高の評価を貰っている! それはそうだよ! 行人の作品に最初に魅了されたらこの私が手塩にかけて育てた最高の小説家だよ! 面白くないわけがないじゃないか! 教えてくれていれば、もっと素晴らしい

いものに仕上げたあげたつていうのに……。」

行人 「何言ってるんだ……？」

悠里 「ああ、でも、世に出てしまったから担当の編集が付くんだろうなあ。高校を卒業したら、専業の小説家になって、いつか私の手の及ばないところへ行ってしまうんだろうなあ。そんなの……嫌だ。」

行人 「え。」

悠里 「私の……。私の為の小説家が、得体の知らない他人の手によってどんどん手あかまみれになって、どんどん駄作を生み出す作家になってしまう！ ダメだよ、いやだよそんなの。行人は私のなの！ これも……きつと編集の手が入っているんだろう。行人の良さを殺している。それに、青すぎるよ行人。」

行人 「悠里？ なあ、悠里。」

悠里 「足りないよ。全然足りない。作家には誰にも理解できない強烈な闇が必要なんだ。このままじゃ、埋もれちゃうよ……。仕方ない……。私が、作家桜庭行人を完成させてあげるよ。他の誰でもない、私が。」

行人 「これじゃまるで……。」

悠里の記憶が移り変わり、屋上。行人は悠里をフェンス越しに見ている。

行人 「悠里！」

悠里 「バイバイ。君は最高の作家になるんだ！」

飛び降りる悠里。人のつぶれる音。

行人 「俺の為に……？」

悠里の夢が終わる。

唯慈 「桜庭さん？」

行人 「……。」

唯慈 「大丈夫ですか？」

行人 「あ、ああ。大丈夫だ。」

唯慈 「悠里さんはどうだったんですか……？」

行人 「悠里は……。」

唯慈 「うっ！」

行人 「え、どうした？」

美穂 「唯慈ちゃん!!」

唯慈 「ご……めんなさい……話を……。」

行人 「しゃべるな。」

亘 「ナースコール！」

美穂 「もうやっってるわよ！」

行人 「これ……。」

行人は唯慈の本に気が付く。葵が扉を開け放ち入ってくる。他のスタッフも一緒に入ってくる。

葵 「どうしたの!？」

唯慈の様子を見る。

葵 「院長に連絡を！ 唯慈を処置室へ！ 手術の準備を！」

スタッフ 「はい！」

行人 「待ってくれ！」

葵 「何!？こっちは時間がないの!？」

行人 「唯慈！」

葵 「ちよっと！」

行人は唯慈に、唯慈の本を開いて渡す。唯慈はそれを受け取る。唯慈はねねの記憶の世界に入り、意識を失う。

葵 「唯慈!?! 急いで！」

葵は、唯慈、スタッフと一緒に部屋を出ていく。部屋には、行人、美穂、亘、沙月が残る。

美穂 「あの本って。」

行人 「……。」

亘 「おい手術って大丈夫なのかよ！」

美穂 「黙りなさい！」

行人は黙って部屋から出ていく。

亘 「おい！」

行人は外へ出ていく。沙月は行人を追いかけていく。

美穂 「私たちも行きましょう。」

亘 「ああ。」

美穂と亘も外へ出ていく。

本を読んでいるねねとシヤマシユ。

ねねが本を読み終わり、閉じる。

シヤマシユ「お帰り。」

ねね 「……これが私の最後の願い。」

シヤマシユ「思い出せたかな。」

ねね 「はい。」

シヤマシユ「それでは、契約と行こう。」

ねね 「はい。」

シヤマシユ「ルールは3つ、君と思いの深いものを持っている人間は君の事が見える。触れないけどね。願いを叶えた後、君は速やかに次の輪廻の流れに乗る。やりたいことはすべてやっておくことだ。期間は49日、僕の力で君を維持できるのはそれだけだ。その期間を超えると君の魂は摩耗して、回復は出来なくなってしまう。いいね。」

ねね 「大丈夫です。そんなにかかりません。」

シヤマシユ「なら、契約は完了だ。」

ねね 「今までお世話になりました。」

シヤマシユ「元気でね。」

ねね 「はい。」

ねねは扉を開けて出ていく。

シヤマシユ「さて……。」

シヤマシユは図書館の扉を抜けて出ていく。

○シーン25 高梨病院 修一朗の部屋

部屋に一人、ぶつぶつぶやいている修一朗。

修一朗 「大丈夫だ。ドナーも間に合った。何度もシミュレーションをした。何度も夢に見た。絶対、絶対に成功させる。くう……。」

そこへねねがやってくる。

ねね 「修一朗さん」

修一朗 「絶対に……ねねの時のように、失ってたまるか……。たった一人の娘だぞ……。」

ねね 「修一朗さん！」

ねねは修一朗に触れることは出来ないが、寄り添うように近づく。

修一朗 「……。なんだ？」

ねね 「修一郎さんは最高の心臓外科医だから、怖がらないで。」
修一郎 「……。」

ねね 「私の旦那さんなんだからきりつと前を向いて、かっこよく。ね。」
修一郎 「……。行ける。」

葵 「院長！ 唯慈の容態が！」

修一郎 「準備は出来ている。スタッフを集めてくれ。緊急手術を行う。」

葵 「はい！」

修一郎 「大丈夫だ。もう絶対に失ったりはしない。」

修一郎と葵は部屋を出ていく。

○シーン26 病院の敷地内 夜

一人外を歩いている行人。後ろに沙月が付いてくる。

行人 「……。俺は……。」

シャマシユが扉を開けてやってくる。

シャマシユ 「や。」

沙月 「シャマシユさん」

行人 「……何の用だ？」

シャマシユ 「そろそろ君が自分の無力に打ちひしがれている頃かなって思ってたね。」

行人 「……」

シャマシユ 「すっかり元気がないね。いつもだったら喧嘩売ってたのかとか、ぶつ殺すぞとか怒り出すところなのに。」

行人 「用がないなら帰れよ。」

シャマシユ 「用はあるさ。本、読んだら？」

行人 「ああ。」

シャマシユ 「書いてあることがすべてだよ。」

行人 「……悠里は小説に対してねじの外れた奴だった。それが、俺が小説家として完成するために、死ぬなんて……意味がわかかんねえ……。」

シャマシユ 「それが藍田悠里という人間の生き方だったのさ。受け入れることは出来るかい？」

行人 「……。俺は……、ずっと、望まれていなかったんだって思っていた。悠里は死んで、2作目は批判の嵐、エゴサすれば落ち込むだけ。小説家なんてなるんじゃないかってずっと思ってたんだ。金だけはあったんだ。1作目が売れた時の金がたくさん。だから、それさえあればいいんだってずっと逃げてた。それなのに……。みんなが俺が小説を書くことを望んでいる。もう書きたくないって言うてんの……。」

シャマシユは一冊の本を行人に渡す。

行人 「なんだよこれ。」
シヤマシユ「今まで君が呼んでいた本は乗り越えなければいけない過去だとしたら、これは受け入れなければならない現実だよ。」
行人 「誰の記憶なんだ？」
シヤマシユ「それは、読んでからのお楽しみさ。」
行人 「……。」

行人はゆっくり本を開く。和樹の記憶の世界へと入っていく。

○シーン27 和樹の記憶

テーブルの上で本を読んでいる沙月。そこへ和樹がやってくる。それを見ている行人

行人 「……。」
和樹 「それ、もしかしてモモですか？」
沙月 「え？」
和樹 「あ、すいません……珍しいの読んてるなあって……。」
沙月 「ご存じなんですか？」
和樹 「はい、昔から好きな本で、今でもよく読んでいます。」
沙月 「素敵ですよ。時間の大切さ。大人になってから身に染みてます。」
和樹 「時間とは、生きるという事、そのものだからです。そして人の命は心を住みかとしてるからです。」
沙月 「人間には時間を感じ取るために心というものがある。そして、もしその心が時間を感じ取らないようなときには、その時間はないも同じだ。」
和樹&沙月 「マイスター・ホラ！」
沙月 「ぶっ、あはははは！」
和樹 「あははははは！」
行人 「……。」

和樹の記憶が移り変わる

○シーン28 ねねの記憶 高梨病院 夜

ねねの記憶に入り込んだ唯慈。

唯慈 「あれ……。私……。そっか……。あーあ、これでおしまいかあ。まあ、よく生きた方だよな。」
ねね 「修一郎さん！」

唯慈の横をねねが通り過ぎていく。

唯慈 「あの人……。お父さん？」
修一郎 「走ると体に悪いよ。」
ねね 「ごめんなさい。会えたのがうれしくて。」
修一郎 「こっちがひやひやするんだ。頼むからじつとしていてくれ。」
ねね 「はい。でも、いざという時は修一郎さんが直してくれるんでしょ？」
修一郎 「もちろんだ。そのためにいつも勉強をしているのだからね。」
ねね 「楽しみに待ってますね。」
修一郎 「ああ。任せてくれ。」
唯慈 「これ夢？」

○シーン29 和樹の記憶

和樹が赤ん坊を抱いている。

沙月 「ね。この子は幸せになれるかな？」
和樹 「なれるさ、僕らの子なんだから。」
沙月 「そうだね。私たちの子だもんね！」
和樹 「ああ。絶対僕が二人とも幸せにしてみるよ！」
沙月 「こら！」

和樹は沙月に軽くはたかれる。

和樹 「いた。」
沙月 「二人で、でしょう？」
和樹 「ああ、そうだね。」
沙月 「この子も本が好きなるかなあ？」
和樹 「なるさ。僕らの子なんだから。」
沙月 「あはは、そうだね！」
行人 「……。」

○シーン30 ねねの記憶

椅子に座っているねね。修一郎も一緒にいる。

修一郎 「君は、幸せだったか？」
ねね 「何バカなこと聞いているの。」
修一郎 「私は、きつと今後の人生を不幸だと思ってしまっ。」
ねね 「私は幸せだったよ。」
修一郎 「……。すまない。」
ねね 「謝らないで、あなたは全力を尽くしてくれたんだもの。」
修一郎 「ねね……。」

ねね 「ああ、でも、やっぱりあの子の大きくなった姿は見たかったな……。」
修一郎 「……。」
唯慈 「もしかして……。」

ねねの記憶が終わる。

○シーン31 和樹の記憶

ベッドで寝ている沙月。そばに医者がいる。和樹は赤ん坊を抱いている。

和樹 「……。」

医者 「外傷はほとんどないのですが、打ち所が悪く……。申し訳ありません。」

和樹 「……どうしてなんですか……。」

医者 「え？」

和樹 「どうして助けてくれないんですか!!」

和樹は医者に詰めよる

医者 「さ、桜庭さん……。」

和樹 「どこにも怪我なんてないじゃないか！ちゃんと治療はしたのか？ 僕たちが何をしたって言うんだ!! 僕たちはただ……、幸せに暮らしたかっただけなのに!!」

医者は逃げていく

和樹 「目を開けてくれ……。沙月……。」

赤ん坊が泣きだす。

和樹 「行人……。お前は……絶対に……僕が守るからな……。」

行人 「……。」

○シーン32 ねねの記憶 図書館

ねねが図書館で佇んでいる。シヤマシユがいる。

シヤマシユ 「おや、珍しいお客さんだ。」

ねね 「あの……。」

シヤマシユ 「お名前は？」

ねね 「……思い出せません。」

シヤマシユ 「構わないよ。それなら、君にはこれを。」

ねね 「本？」

シヤマシユ 「開いてごらん。」

ねね 「……はい。」

ねねは本の読み始める。

シヤマシユ「時間はかかるだろうけど、がんばって。」

○シーン33 和樹の記憶

柳田がいる。

柳田 「行人君に合わせて下さい。」

和樹 「お断りします。」

柳田 「彼の作品は素晴らしい！ もっと世界に出すべきです！」

和樹 「行人は消えない傷を負った。もうこれ以上追い詰めないでくれ!!」

柳田 「桜庭さん！」

和樹 「帰れ！」

柳田は引き返していなくなる。

行人 「……。」

和樹の記憶が終わる

○シーン34 唯慈の無意識の世界

唯慈の目の前にはねねがいる。

ねね 「生きたい？」

唯慈 「……。」

ねね 「もっと長生きしたい？」

唯慈 「……んー、そんなに？」

ねね 「どうして？」

唯慈 「だって、発作が出たら苦しいし、運動もできないし、明日急に死ぬかもしれないんだよ？ だったら、早く終わってほしいなってずっと思ってた。」

ねね 「そうだよね。私も同じ事思ってた。」

唯慈 「今は？」

ねね 「もっと沢山、生きたかったなって思ってる。だって、唯慈がいたから。」

唯慈 「やっぱり、お母さんなんだね。」

ねね 「うん、大きくなったね。」

唯慈 「だって、もう20歳だよ。」

ねね 「綺麗になったね。」

唯慈 「……。ねえ、お母さん。私もう、生きるのが辛いよ……。」

ねね 「……。」

唯慈 「学校に行きたかった……。もっと外で遊びたかった……。友達がもっと欲しかった……。見たことない物とか、たくさん見たかった……。もっと、ちゃんと他の人みたいに、生きたかったよお！」

ねね 「唯慈……。」

唯慈 「絶対、この発作が最後なんだ！ もう起きれない！ お父さんにも葵ちゃんにも会えない！ 桜庭さんのお話を読むことももうできない！」

ねね 「……唯慈は今を不幸だと思ってる？」

唯慈 「不幸に決まってるよ。」

ねねは唯慈を抱きしめる。

ねね 「そうだね。でもね？ 不幸を重ねた数だけ、必ず幸せは来るんだよ。神様はちゃんと見てるから。きつと、これから信じられないくらい大きな幸せを手に入れることが出来るよ。だから、生きて。生きたいって願って！」

唯慈 「……もっと生きたい！ 幸せになりたい！」

ねね 「うん。」

ねねはさらに唯慈を強く抱きしめ、頭をなでる。唯慈は安心して、眠りにつく。ねねは唯慈をベッドに誘導していく。

○シーン35 病院の敷地内 朝

本を閉じる行人。見守っているシヤマシユと沙月。

シヤマシユ「お帰り。」

行人 「……。」

沙月 「……。」

行人 「受け入れるべき現実、だっけか。」

シヤマシユ「そうだよ。」

行人 「……。俺が逃げてきた物って、いったい何だったんだろうな。」

シヤマシユ「自分がたくさんの人に愛されているって知ってびっくりした？」

行人 「……。これが愛を忘れるってことなんだな。」

シヤマシユ「その通り、人によるけどね。さて、これも渡しておこう。」

行人 「今度は誰のだよ……。」

シヤマシユは持っていたモモを行人に渡す。沙月が見えるようになる。

行人 「あ……。」

沙月 「……え？」

シヤマシユ「さあ。」

シヤマシユは沙月の背中を押す。

沙月 「え、えっと……。」
行人 「……。」
沙月 「見えてる？」
行人 「ああ……。」
沙月 「……そっか。」
行人 「……ごめん。」
沙月 「……ううん。」
行人 「えっと……。」
沙月 「ん？」
行人 「……ありがとう。母さん。」
沙月 「……うん。幸せになってね。」

沙月は成仏して消えていく。

行人 「……俺さ、決めたことがあるんだ。」
シヤマシユ 「そうかい。」
行人 「行ってくる。」
シヤマシユ 「いってらっしゃい。」

行人は家に帰る。シヤマシユはそれを見送り。図書館へ帰っていく。

○シーン36 唯慈の部屋 朝

手術が終了した唯慈ベッドの上で目が覚める。周りには美穂、亘葵、修一郎が唯慈の事を見守っている。

唯慈 「……あ、あれ……？」
美穂 「唯慈ちゃん!!」
葵 「唯慈!! ……良かった……。」
唯慈 「葵ちゃん……? あれ、二人も……どうして……?」
修一郎 「手術は無事に終了したんだ。」
唯慈 「お父さん……。そっか……。ねえ。」
修一郎 「なんだい？」
唯慈 「夢でね……。お母さんに会ったんだよ……。」
修一郎 「……何て言ってた？」
唯慈 「生きてって……。」
修一郎 「……そうか。」
唯慈 「葵ちゃん……。」

葵 「何？」

唯慈 「私……夢が出来たんだ……。」

葵 「そう。何？」

唯慈 「えっとね……。」

美穂 「よがっただああああああ！」

亘 「うるせえ！」

シヤマシユが現れ、唯慈の本を回収していなくなる。

唯慈 「ありがとう。」

○シーン37 桜庭家 夜

部屋の隅でうずくまっている和樹。そこへ行人がやってくる。モモを持っている。

行人 「なあ……。」

和樹 「……行人……？」

行人 「……飯は？」

和樹 「え？」

行人 「……今日は、ないのか？」

和樹 「あ、ああ。すぐ、用意するよ……。」

和樹はゆつくりと立ち上がり、台所へ向かおうとする

行人 「俺さ。」

和樹 「？」

行人 「……。また、書くよ。小説。」

言いながら、行人は持っているモモを渡す。

和樹 「……そうか。」

行人 「だから、また、よろしく頼む。」

和樹 「ああ。」

○シーン38 図書館

図書館内を本を探しながら歩いているシヤマシユ。

シヤマシユ「愛し愛され、求め求められ、育み、学ぶ。親から子へ思いを伝え、子は親の心を知らず。価値観なぞ合うわけもなく、小さな軋轢から争いを起こす。僕たちが君たちを作ったのは9000年ぐらい前。あの日から君たちはずっと変わらず存在してくれている。創造物は創造主を愛さないが、創造主はきちんと愛しているんだよ。dumu.ene.gak。あは、

柄にもなく浸ってしまったね。」

○シーン39 5年後の桜庭家

椅子に座って、原稿を書いている行人。

行人 「……。」

和樹 「行人ー！ 新しい担当さんが来たぞー！」

行人 「おー！」

スーツ姿の唯慈が入ってくる。

行人 「すみません、散らかっていて……。」

唯慈 「トウリクシヨンの新人編集者、高梨唯慈です！ よろしくお願いします！」

行人 「……待ってたぞ」

唯慈 「……お待ちしました。」

行人 「よろしく唯慈。」

唯慈 「はい！」

打ち合わせを始める二人。シヤマシユが現れる。行人の新作の本を持っている。

シヤマシユ「いいものを見せてもらったよ。やっぱり、物語はハッピーエンドに限る。そのまま永く。お幸せにね。いいタイトルじゃないか。楽しみだ！」

完